

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21390575

研究課題名（和文）：看護プロフェッショナルに向けた遠隔臨地実習のウェブ基盤学習支援の開発と評価

研究課題名（英文）：Development and evaluation of a web-based learning program assisting students practicing in remote clinical field

研究代表者：

田代 順子（TASHIRO JUNKO）

聖路加看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30134175

研究成果の概要（和文）：

今日、増大する看護ニーズに応える専門看護師教育の動向の中、省察的実践力育成のため、遠隔臨地実践での学習支援プログラムを“Reflective Practice”の文献検討と先進施設の視察から、ウェブでの「リフレクティブ・ログ」を開発した。試用の結果、遠隔地で『リフレクティブ・ログ』を活用することにより、日々の実習内容を振り返り、自己吟味および地理的距離の問題なく、適宜コメントが得られ、実習の目的が出来たと評価されたが、本プログラムに指導の経過の記録が残らず、学生の変化が捉えられない課題が抽出された。今後、これらの課題を改善し、看護実践力強化を支援できるウェブ基盤学習支援プログラムの継続開発を進める。

研究成果の概要（英文）：

A web-based learning program which was “reflective log or journal” in order to strengthen the competency of reflective practice, especially for students practicing in remote a clinical field based on a literature review of “Reflective Practice” and hearing from experts in education using reflection in England. Graduate students used this e-reflective log reported that they could reflect on their daily practicum by themselves and communicated with their faculty without a time-gap. However, some faculty members stated their comments to students were sent by using e-mail which was not incorporated to this web-system and therefore they did not remain and faculty could not monitor their changes. This web-based reflective log system should be developed and become a more comprehensive learning, as well as communication, tool for both students and faculty.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2010 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2011 年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	13,200,000	3,960,000	17,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：省察的実践、看護実践力、ウェブ基盤学習、リフレクティブ・ジャーナル
記述力、分析力、自己意識、プロフェッショナル

1. 研究開始当初の背景

今日の日本の少子高齢社会を背景にグローバルな視点で捉えるべき健康・看護問題に対応できる看護専門職（プロフェッショナル）（基礎看護教育のあり方に関する懇談会、2008）を育成する教育方法の開発が急務となっている。特に、看護プロフェッション教育は、実践からの学習する能力の育成は重要であり、看護基礎教育から修士課程までの系統的实践力育成は重要である。加えて、臨地実習の場が拡大し、これまでの実習学習形態を見直す必要がある。

2. 研究の目的

日本における看護プロフェッショナルへの教育に省察的实践力育成を軸に、プロフェッショナルな実践力開発を Reflective Practice（省察的实践）（Lowenstein & Bradshaw, 2001; Schon, 1983）と Electronic Communication Strategies（Lowenstein, 2001）を枠組みとして、ウェブ基盤の学習支援プログラム（e-リフレクティブジャーナル）を開発し、その学習プログラムを評価する。具体的目標は、平成 21 年：1）省察的实践の概念的理解を深め、プロフェッショナル教育先進国の事例を視察する。2）学生・院生の遠隔実習・実践からの省察的学習を調査する。平成 22 年：3）大学院生の遠隔実習のためのウェブ基盤の学習プログラムを視察する。平成 23 年：4）遠隔地で実習する大学院生のウェブプログラム試用しての評価をもらい、ウェブ基盤プログラムの見直し修正をすることであった。

3. 研究の方法

本研究の3年間を、年度毎に下記の方法で進めた。

平成 21 年度 (2009 年) :

1) 省察的实践・省察的学習に関する文献的情報統合

看護プロフェッショナル能力としての省察的实践 (reflective practice) の既存の文献からの統合的文献レビュー動向とその知見をまとめ、日本の看護教育の状況を踏まえ、どのように、実践から学習が成り立つかについての概念化し、学習モデルを構築した。

2) 省察的实践・学習の先進施設の現地視察と招聘、日本での公開ワークショップ

省察的实践教育の先進施設：Oxford Brooks University の視察と聞き取り調査

を実施する。また講師を招聘し、公開研究ワークショップを開催した。

2011 年度にも、Glasgow Caledonian University の Professor Barbara Perfitt を招聘し、21 世紀の看護プロフェッショナル育成の視点を講演してもらい、参加者と公開研究ワークショップを開催した。

平成 22 年 (2010 年) :

3) 学生・院生の現状の遠隔実習・実践からの省察的学習 (気づき) の面接調査

(1) 調査期間 2010 年 1 月～3 月末日

(2) 研究協力者と数

研究対象は研究協力が得られた学部生および大学院修士課程の院生である。研究の目的にそって、対象を：①学部生は看護学部 1・2 年生でサービス・ラーニング履修生で、大学外でのヘルス・ボランティア実践活動をした修了者、②学部 3 年生で、大学を離れた臨地実習場で実習した学生、③修士課程院生で、臨地で実習・研究活動した院生であった。それぞれ 3～5 名程度に依頼した。

(3) 研究協力者のリクルート方法

研究協力のお願いを大学掲示板、及びサービス・ラーニング履修修了者へは e-メールを送信して公示し、協力意志の学生院生からメールでもってもらい、研究者から希望する面接日程、研究同意書、研究中止届けを、メールで配布した。

(4) グループあるいは個別面接調査

面接調査は、希望の日時にあわせて、グループあるいは個別で実施した。面接の場所は、研究機関の可能な演習室で行った。

インタビューは博士課程修了の調査員が、インタビューガイドに沿って行った。

面接では、(1) 学生が認知している各自の実践から学べたと思うこと (体験)、(2) 体験を記録することに関して；①意義、②難しさ・課題、③今後の目標・改善点、④学習支援にたいする希望等を質問する。インタビューは、全て ICレコーダーによって記録し、面接メモ、面接サマリーを記録した。

(5) 面接調査データ分析

録音されたインタビューデータは逐語録とし、内容分析を行った。

4) 上級実践実習担当者の実習支援の調査：

上級実践者担当者に、実習支援に関して面

接調査を行った。面接では、①臨地実習・演習・研究での指導過程、②学生の実習からの学び、③学びの支援方法、④学生の学びの阻害状況の経験と⑤その緩和・解決策、⑥Webログの評価について質問した。

平成 23 年 (2011 年)

5) モデル試案の作成と既存ウェブの見直しと修正

研究の結果を統合し、「ウェブ上記録・コミュニケーションを活用した省察的学習支援モデル」試案を作成した。

6) 改善ウェブの試用してのモニターによる質的評価研究

モニターに試作中のWeb 上の記録 (ログ) (<https://www.lukavo.jp/lite/>) を、主に大学院生に試用してもらい、省察的実践学習を支援するWebとしての点から面接で評価研究した。質問項目は：(1)実習あるいは演習進め方 (過程)、(2)試用中での学び・気づき、(3)指導やカウンターパート、(4)課題、(5)振り返り、(6)Web ログの感想、(7)ウェブログの意見について、であった。

7) 遠隔実習からの省察的学びのためのウェブベース学習プログラムの課題の明確化

院生を遠隔地での臨地実習を指導している教員とミーティングを持ち、教員側の指導の課題を記述し、上級実践者の学習支援するWebを計画した。

4. 研究成果

平成 21 年：

1) 省察的実践・学習の先進施設の視察

2009年10月に多くの著書を持つ英国のOxford Brooks UniversityのDr. Chris BulmanとMs. Sue Schutzを訪問した。2010年2月に両氏を招聘し、ワークショップを開催した。プロフェッショナル教育の理論的基盤と教育・実践への活用への示唆を得た。日本では、基礎看護学で導入している神戸大学保健学科看護学専攻の田村由実教授を訪問調査した。成果、Reflective実践および学習は課題をReflectiveサイクルにより、思考や志向性を高めるスキルと考えられ、看護の専門性を高めるためには継続的にスキルを強化する方法の構築が重要であることが共通の見解であった。

2) 省察的実践・省察的学習に関する文献的情報統合：

本研究の中核概念：「省察的 (Reflective)

実践・学習」に関する文献を収集し、「Reflective Practice in Nursing」の概念を分析し、教育アプローチであり、プロセス概念として理解できた。本概念分析は公表した。

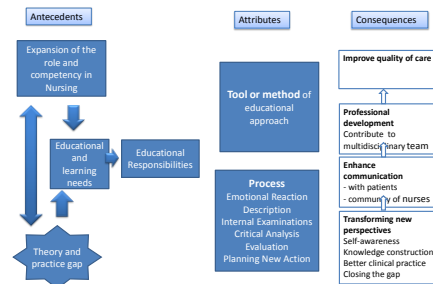


Figure 1. Concept of reflection in nursing professional development

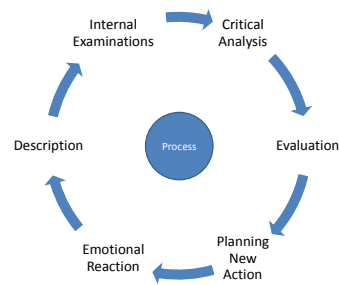


Figure 2. Circular process of reflection

平成 22 年：

3) 学生・院生の現状の遠隔実習・実践からの省察的学習 (気づき) の面接調査

学部生：サービス・ラーニング科目でリフレクティブ・ジャーナルをWeb上実施した学生5名、海外ボランティア・実習経験者各1名；院生：海外演習/研究の体験1名を面接調査した。結果、実践後のジャーナルは、自らの活動の記述を通して数ヶ月の自らの学習・成長に繋がる経験であり、さらに、海外で研究する院生にとっては自分の活動とその時の感情を冷静に振り返ることができ、加えて、適宜、教員からフィードバックを受け、問題への適切な対処できたと報告した。同時に、海外からWebへのアクセスは時間がかかるため、Webの軽量化の必要性が明らかとなり、修正を加えた。結果、修士課程の全ての院生はより長期に遠隔地での演習・実習を行っており、院生への実践学習支援の重要性があるとの見解を得た。さらに、臨地実習を終了した学部4年生5名から実習での学びの体験を調査した。多くの学生が実習での知識の

統合をする体験を報告した。所定の実習記録用紙に記録することで学習が進められていた。大学院生は、課程修了した大学院生9名から臨地実習での体験を調査した。臨地実習が長期で、実習場でのメンターを主な支援者として学ぶため、孤独な学びの過程であり、教員および学生間でのコミュニケーションの必要性に関して報告した。

この研究成果は、第31回日本看護科学学会学術大会で発表した。

4) 上級実践実習担当者の実習支援の調査：臨地実習指導の教員5名の調査を行った。教員は、院生は数名を担当し、メール等を活用してコミュニケーションをとりつつ学習支援が進められていた。認定看護師教育は教員一人で数十名を担当するため、学習支援が十分でない。臨地実習指導者と学生とのさらなる調整活動や、認定看護師のアセスメント・計画・実践の思考過程への強化のため更なるコミュニケーションが必要であると報告した。学部学生および院生のニーズ調査から、学部生より院生および認定看護師受講生の臨地演習および実習でのログ作成と教員等とのコミュニケーション強化の要請は大きいと考えられた。

5) 既存ウェブの見直し、と修正：軽量化した「プラクティス・ログ Web 上の記録 (ログ) (<https://www.lukavo.jp/lite/>)」を、作成した。

6) 改善ウェブの試用してのモニターによる質的評価研究

修士5名、博士2名が改善ウェブの試用を行い、質的評価をした。国内(3件)：訪問看護ステーション、被災地、国外：インドネシア、ラオス、バングラディシュ、米国での演習であった。

(1)実習あるいは演習進め方(過程)、国外での演習は、初めての地であり、不安であった。また、実習受け入れの現地のメンターの支援を受けて行った(3件)。事前に情報収集をし、受け入れ先とも連絡をとって研修を行った(1件)。

教員とは、週1回程度のレポートとしてウェブを活用した(3件)。必要時、レポートをし、研修計画を発展させて行った(1件)。国内：①複数の実習の場と、多くの職種の中で実習をした(1件)。②初めてのデータ収集経験で、多くのグループ参加し、手探り出進めた(1件)。③被災地で、初回は住民から不満をぶつけられる経験をし、関係を作りな

がら進めた(1件)。

(2)ウェブ試用しての遠隔実習や研究活動の評価：院生の評価は、①実習あるいは情報収集の記録、振り返りができ、②次の実習計画が記録作成中にでき、同時に、③指導教員に報告や質問ができるので、遠隔地での実習と指導者とのコミュニケーションの時間差がなく、適宜、⑤適切な助言があり、現地での活動での不安が軽減されたと報告された。

(3)ウェブアシスト実習・演習の課題・意見：課題は、海外において、特に、インターネットの使用環境が開発されていない国においては、ウェブへのアクセス障害や、コンピューターにトラブルが起こる等の問題が報告された。

要望として、大学院での実習・演習や研究活動は、単独で遠隔地で活動することになり、同じ状況にある院生間のコミュニケーションが取れるとよいので、このウェブアシストのプログラムがあると、各遠隔地で活動している院生間のコミュニケーションが可能になり、さらに、遠隔地での実践学習が教員のみならず院生間のコミュニケーションを参考にしながら進められるので有用であるとの意見もあった。

本研究成果は、9th International Conference with the Global Network with WHO で June 30th で採択され、発表予定である。

7) 教員からの評価

教員からの評価は、学生の遠隔地での臨地実習・研修状況の把握は適時出来るとの肯定的評価であった。しかし、現在のプログラムでは、教員のコメントがメールであり、学生の学習プロセスの電子的データとして一体化されていない課題が報告された。

8) まとめ

今日、新たに開設されている上級実践看護コースの修士課程の大学院生リフレクティブプラクティスがより重要な課題と考え、ウェブでのプラクティス・ログを大学院生用に改善し、大学院生に試用し、その教員と評価してもらった。院生の評価は、概ね肯定的であった。特に、海外での演習・研究する院生にとって、滞在期間に限られる中で、問題を持った段階で、ログを書きながら、その問題とその問題を抱える自らを省察し、そのログを直ぐに教員へ送り、さらに、教員とのコミュニケーションやコメントにより、対処が容易であったと報告していた。しかしながら、試用に参加していただけた教員と院生は限られていた。ウェブでの学習、あるいは学習支援は新たな教育的なアプローチであり、普

及するには時間がかかると考えられた。

今日、上級実践看護教育においてますます実習・演習が重要になってきている。今後、上級実践教育においてWebアシストの教育ツールの理解を広げ、多様な看護上級実践学習を支援できるプログラムを、Webの利点を活用して開発し、院生にとっても、教員にとっても使いやすい効果的に学習支援できるプログラムに発展させたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① J. Tashiro, Y. Shimpuku, K. Naruse, Maftuhah, M. Matsutani, (2012).
Concept analysis of reflection in nursing professional development, Japan Journal of Nursing Science 査読有り (Online-journal 掲載予定)
- ② 田代順子、瀬戸山陽子、平林優子、長松康子、大森純子 (2011). Webによるサービス・ラーニング(総合科目Ⅲ 生活科学論)の初年度の科目の進め方と評価、聖路加看護大学紀要、査読無、第37巻、25頁から30頁
- ③ 田代順子、長松康子、松谷美和子、菱沼典子、及川郁子、平林優子、麻原きよみ、大森純子、佐居由美 (2009). Web上でのヘルス・ボランティア学習支援プログラム試用の評価・改善とカリキュラム化. 聖路加看護学会誌 査読有り Vol.13 No.2 July 2009 53—62.

[学会発表] (計 2 件)

- ① 新福洋子、田代順子、松谷美和子、及川郁子(2011). 看護プロフェッショナル育成のためのウェブ基盤学習支援システムの開発に向けた遠隔臨地実習のニーズ調査. 第31回日本看護科学学会学術大会. 2011年12月3日、高知
- ② J. Tashiro, Y. Shimpuku, M. Matsutani, I. Oikawa (2011). Development and Evaluation of a Web-Based Reflective Service-Learning Course in Nursing Education in Japan, at ICN Conference, (c_410_d) M.A.Grima Hall in Galletta, Malta, 7th May 2011.

[その他]

ホームページ等

<https://www.lukavo.jp/lite>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田代 順子 (TASHIRO JUNKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：30134175

(2) 研究分担者

松谷 美和子 (MATSUTANI MIWAKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60103587

及川 郁子 (OIKAWA IKUKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：90185174

中山 和弘 (NAKAYAMA KAZUHIRO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：50222170

(3) 連携研究者

菱沼 典子 (HISHINUMA MICHIKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40103585

麻原きよみ (ASAHARA KIYOMI)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号:80240795

山田 雅子 (YAMADA MASAKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号:30459242 (H23)

林 直子 (HAYASHI NAOKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号:30327978 (H23)

亀井 智子 (KAMEI TOMOKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号:80238443 (H23)

平林 優子 (HIRABAYASHI YUKO)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号:50228813

大森 純子 (OMORI JUNKO)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号:50295391

長松 康子 (NAGAMATSU YASUKO)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号:80286707

宇都宮明美 (UTSUNOMIYA AKEMI)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号:80611251 (H23)

卯野木 健 (UNOKI TAKESHI)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号:40465232 (H22)

研究協力者:

Sue Schutz
Oxford Brooks University, Senior
Lecturer (H21)

Chris Bulman
Oxford Brooks University, Senior
Lecturer (H21)

成瀬和子
聖路加看護大学大学院 リサーチアシス
タント (H21)

Maftuhah
聖路加看護大学大学院 リサーチアス
タント (H21)

新福洋子
聖路加看護大学 博士研究員 (H22-23)